

カントウータ

Cantuta

No.1

平成 14 年 4 月発行
(社)日本ボリビア協会

ご挨拶

会長 山下徳夫

今般協会から、機関紙「カントウータ」を発行することになりました。ここにその第 1 号をお届けします。「カントウータ」はこれまでご愛読いただいた「ボリビア情報」を発展させたもので、ボリビアに関する種々の話題、人の動き、催し物その他会員の皆様のご投稿をお待ちしています。「カントウータ」を温かく育てていただきたく、皆様のご協力をお願い致します。

平成 13 年度第 1 回理事会の開催

7 月 25 日(水)午後 3 時 30 分より、日本ボリビア協会事務所において理事会が開催され、『ボリビア情報』の今後の発行について、そして、13 年度の今後の活動について議論された。理事会終了後、納涼会が行われた。

山城保徳氏 春の叙勲にかがやく

オキナワ移住地のリーダー的存在として多年にわたり貢献され、平成 13 年度春、勲六等単光旭日章を受章。「私にとって人生最大の喜びであるばかりでなく、子孫に伝えるべき良き財産をお与えいただいたものと感謝。人のために少しでも役立つことが私の生活信条として生きてきたので、今回の受章はこの信条を子孫に伝えるものにしたい」とよろこびを語った。

野田利行氏 秋の叙勲にかがやく

元サンフアン日ボ協会長野田利行氏は平成 13 年度秋、勲六等端宝章を受章。「第一次船団として入植後 45 年経過しましたが、その間 6 年も病床にあり、現在生を得ているのも皆様方のご協力のおかげと感謝しています。この度の受章も諸兄をはじめ皆様方のおかげと感謝申し上げます。現在強く印象に残っていることは、農協で鶏卵を直接取り扱ったことが営農安定につながったことと、日ボ協会経営の学校教育に日本語の教育が高く評価されたことです」と語っている。

人事消息

大使退任

1 月 25 日付木本博之大使が退職した。

新大使の任命

10 月 16 日、新ボリビア大使に佐々木肇前クリチバ総領事が任命された。当協会では、11 月 15 日新宿「今半万窯」で同大使の歡送昼食会を開催。山下会長以下有志理事の激励を受けて佐々木大使は同月ラパスへ出発した。

訃報

ラパス在留邦人の長老の井門泰氏が 10 月亡くなられた。同氏のボリビアの政財界の要人との交際は有名であり、チェ・ゲバラがボリビアにゲリラとして潜入した際の

ゲバラの同士タニアとの親交も知られている。また在ラパス日本語補習校の校長として長年日本語の普及に尽力された。日本政府からも叙勲され、同氏の死去はボリビアの邦人社会から惜しまれている。

外務次官の来日

ボリビア外務省の国際経済担当次官アナ・マリア・ソラーレス女史が10月4~14日、日本外務省の招待で来日。同次官は滞日中、紀宮清子内親王殿下への謁見、要人との会見、広島および関西方面視察等精力的に活動した。10月9日在京大使館主催の同次官歓迎昼食会には当協会から林屋副会長および豎山理事が出席した。

海外日系人大会代表の訪日

10月23日、第41回海外日系人大会が千代田区の砂防会館で開催され、ボリビア代表としてラパス日本人会の西会長が出席した。

日系人指導者研修計画

外務省の「平成13年度中南米諸国日系人指導者研修計画」にボリビアから参加のためサンファン移住地の教育担当理事原邦夫さん(36歳)が来日した。2月22日芝のメルパルクで開かれた中南米局西林参事官主催の歓迎レセプションには当協会から渡邊専務理事と豎山理事が出席し、原さんその他参加者と懇談した

ボリビアの話題

ボリビア集中豪雨災害

ボリビアで2月19日の夕方に首都ラパスおよびその周辺で豪雨とヒョウが降り土石流などで大きな被害が発生しました。現地時間20日14時の被害状況は以下のとおりです。

死者数 : 72名
負傷者 : 103名
避難者数 : 約1,800名
被災者総数 : 約3,000名

ボリビア・ラパス市および周辺部水害被災者見舞金御協力お願い

ボリビア外務省の要請により、被災者への見舞金を集めて、送金するため、下記口座を開設しました。御協力お願い申し上げます。当協会役員も最低1万円以上の寄附を決定しました。

銀行名 : 三井住友銀行丸の内支店
口座名 : ボリビア水害見舞金口
口座NO. : 普通預金口座 NO. 1439947
TEL NO. : 03-3216-0442

バンセル前大統領に男の子

昨年8月に大統領を辞任したウ・ゴ・バンセル氏に、23歳になる男の子がいることがわかり、ボリビア中の話題になっている。この子の名はウ・ゴ・バンセル・ドノ・ソ

(Hugo Banzer Donoso)。
バンセル氏が軍事ク・デタ・で大統領に就任した1971年、訪れたタリハ市で見初めたイサベル・ドソ・ノ・トリ・ゴ嬢との間の愛の結晶で、バンセル氏が大統領を追われる1ヶ月前の1978年2月28日サンタ・クルスで生まれた。母親のイサベルさんは1970年のミス・タリハで同年のミス・ボリビアの3位になっている。バンセル氏の花束と手紙の山に最初は戸惑ったがその後愛に変わった由。バンセル氏は子供が生まれて2週間後に認知している。23歳のバンセル2世は、昨年8月23日、サンタ・クルス市で「エル・デベ・ル紙」に自ら真相を発表し「父親を尊敬している。将来は政治家になってボリビアのために働きたい」と語った。なおバンセル前大統領にはリヨランダ夫人との間に2人の息子と3人の娘がいたが、息子2人をいずれも事故で失っている。今年48歳になる母親のイサベルさんには、離婚した前の夫との間に女の子があり、現在は再婚している。イサベルさんは「もうボリビアの人にこの子のことを知ってもらってもよいでしょう」と語り、記者の質問に「このことを知ったりヨランダ夫人が、バンセル氏に一発ピンタを食らわせたというのは貴方方の推測でしょう」と述べた。

ミス・ボリビアに 20歳のクルセ - ニャ

2001年度のミス・ボリビアの選考会が8月31日サンタクルス（日本ボリビア文化交流会館）で開かれ、18人の候補の中から、地元ミス・サンタクルスのパオラ・コインブラ・アンティピエフ（Paola Coimbra Antipieff）さんが栄冠を射止めた。パオラさんは20歳、177センチで、2002年のミス・ユニバース大会にボリビア代表として参加する。

なお、同選考会では同時に、ミス・インタナショナル大会へのボリビア代表に、ラパス出身のプリシラ・キロガ（Priscila Quiroga）さん（21歳、170センチ）を選出した。プリシラさんは、10月4日、東京中野のサン・プラザで開催された2001年ミス・インタナショナル世界大会に出場したが、惜しくも入賞はならなかった。

航空機汚職

バンセル政権時代の1998年5月に国防省がパナグラ・エア社から購入した航空機（ビ・チクラフト1900）をめぐる汚職疑惑に対し、10月11日会計検査院は当時の国防大臣フエルナンド・キ・フェル氏に民事、行政上の責任があるとの裁定を下した。検査院は、航空市場価格は118万ドルのところ、上乗せされた購入価格は292万ドルであり、このため国庫に173万ドルの損害を与えたことを指摘しており、キ・フェル氏はこの損害を補填する責任があるとしている。キ・フェル氏は、そのような金額は一切受領したことはなく、仮に今回の裁定が最終的に確定しても、支払いはせず、刑務所に入ると反論した。

米国の軍事行動を支持

9月11日米国を襲った同時多発テロの際、キロガ大統領は直ちに米国及び米国民への連帯を表明したが、10月7日米国の軍事行動が開始されると、ボリビア外務省は同日付けで声明を発表し、米国

の行動を支持することを明らかにした。

声明は「ボリビアは、今回の行動は軍事目標に向けられたものであり、アフガニスタン国民に向けられたものではなく、またいかなる人種的、国家的、宗教的、グル・プトの対決も意味するものではなく、国際テロリズムの脅威と対決する必要性にこたえるものであり、自由と平和を希求する全ての諸国と諸国民によって支持されるものと確信する」と述べている。キロガ大統領は「ボリビア政府は米国の行動を全面的に支持する」ことを表明した。

ボリビア人の犠牲者は一人

同時多発テロによるボリビア人の犠牲者は1名であることをワシントンの新聞が報じた。8月31日のプレサ紙が報じたところによれば、犠牲者のダビッド・バルガス・コルドバさん（41歳）はオルロ県のカタリカグア出身のエンジニアで、事件当日世界貿易センターの一つのビルにいて被害にあった模様。事件後現場に赴いた母親のフェリシダッドさんは「息子は生きてると信じている。貿易センタービルには深い地下室があって、そこに息子は生きてにちがいない」と語っている。

エイズ患者は2万人を超えるか？

ボリビアのエイズ対策本部長のラウル・アレバロ氏が9月24日述べたところによれば、ボリビアの国内で正式に報告された患者数は689人であり、その62%は男女間の性交渉から発症している。国際的にエイズ患者は正式発表された数字の30倍存在すると見るのが常識とされており、この見方によれば、ボリビアには2万人を超える感染者がいる。アレバロ本部長はこれを指摘するとともに、国民にエイズ予防の必要性を訴えた。

幼児 15万人が金採掘に従事

国際労働機関（ILO）10月10日の発表によれば、ペルー、エクアドル、ボリビアの3ヶ国で、約40万人が家族規模での

金採掘により生活を支えており、採掘に関わっている幼少年の数は3ヶ国合計で約15万人に達する。

ILOの下部機関である幼児労働根絶国際計画(IPEC)によれば、これら家族では、子供が6歳になると鉱石を探し洗う作業に従事させる。10歳になると鉱石を粉碎し水銀と混ぜる作業をさせる。12歳になると鑿を使って鉱石に穿孔し、また、親の爆薬製造の手伝いをさせる。劣悪な環境の中で働くこれらの子供たちの18%は学校にも行っていない。

IT 海賊版ではラミー

10月8日国際計画調査社が発表した「2000年度ソフトウェア - 海賊版に関する全世界調査」によれば、2000年におけるソフトウェア - 不正使用(海賊版)件数ではボリビアは中南米諸国中最悪の実績を示した。同報告によれば、1995年の92%から2000年には81%まで比率を落とす改善を示したが、依然ラミ中最底の成績であり、エル・サルバドル(79%)、ニカラグア(78%)、パラグアイ(76%)より悪い。ラミの経済大国であるブラジル、メキシコ、アルゼンチンはそれぞれ58%、56%、58%であり、先進諸国については米国25%、西欧34%、東欧63%であった。

国連平和維持軍のボリビア部隊 マラリアに襲われる

アフリカのコンゴ民主共和国(キンサシャ)に向けて、ボリビア人兵士200名からなる一隊が10月26日出発した。同部隊は1999年コンゴ内戦の終結に伴いコンゴの平和維持のため国連が派遣を決定したもので、ボリビア部隊は国連平和維持軍の一翼を担い6ヶ月間コンゴで任務につく。200名は、士官、兵士、コンピュータ技師、医師を含み、うち3名は女性兵士である。一行が携帯する武器は機関銃、ロケット発射機、ライフル銃、拳銃、防弾チョッキ、弾薬筒11万個等である。ボリビアが国連平和維持軍に参加するのは数年前のアンゴラ以来である。参

加兵士には月に1027米ドルの報酬が支給される。

2月3日のボリビア各紙の報道によると、コンゴの国連平和維持軍のボリビア部隊は地方でマラリアに感染し、うち2名が死亡、30数名が緊急手当を受けている。全兵士が首都に戻って検査を受け指示を待っている。

一行の任期は2002年3月までであるが、隊員と家族の間に不安がひろがっている。国連は死亡した兵士2名の家族に一人5万ドルの支給を決定した。ボリビア国防次官は死亡兵士の家族の2年間の生活保証を約束した。

スペインとの養子協定に署名

10月26日キロ - ガ大統領のスペイン訪問中に、ボリビア・スペイン間で「養子に関する協定」が署名された。この協定は国内法によって(協定なしには)外国人との養子縁組を認めていない現在の制度を改め、今後ボリビアの孤児をスペイン人の家庭が養子にすることを可能にするものである。

ボリビアの孤児や貧困家庭の幼児が、幼児売買組織によってスペインのバスク地方の家族に一人1万6千ドル程度で売買されていることが暴露され、スペイン司法当局が組織の摘発にのりだし、ボリビア議会も調査団を現地に派遣する等ボリビア国内で問題化していた背景がある。

王立アカデミ - 辞書に ボリビア語源の800語追加

最も権威あるスペイン語辞書と言われる「スペイン王立アカデミ - スペイン語辞典」の最新版に新たにボリビア特有の語彙800語が採用されることになり、ボリビアの言語学者が歓迎している。旧版の214語と今回の817語を加え、同辞書に載せられるボリビアニスモは計1031語となる。ボリビア言語学アカデミ - 辞書編纂委員会のカルロス・コエ - リョ会長は「スペインアカデミ - の用語採用基準はその語の使用頻度と話される地域の広さであり、今回の決定は同アカデミ -

の民主化を示すもの」としてこのニュースを歓迎するとともに「ボリビアアカデミ - はさらに4000語のアイマラ、ケチュア、グアラニーに語源を持つボリビアニスモをスペインアカデミ - に提出済みである」と語った。同委員会は近く1万5千語のボリビア語源の語を含む辞書を刊行する予定である。

コエ - リヨ会長は、これで「”No Seas caima como esta juntucha de lagua”との表現が堂々と口に出せるようになる」と述べた。(caima はつまらない、面白みのない、塩味の足りない、junchuta は後でたべるために暫く保存しておく食べ物、lagua は小麦、玉蜀黍等の粉で作った固練りス - プ)

アイマラ語インタ - メット

外国語を知らないボリビア人が、アイマラ語だけを使って、ヨ - ロッパやアメリカ人とネット会話 (CHAT) できるシステムが開発され、2002年3月から実用に供される。このシステムはATAMIRIと呼ばれ前国家選挙裁判所長官で数学者のイヴァン・グスマン教授が開発した。英語万能のネットの世界で翻訳システムは、バイリンガルではこれまでも数種類作られているが、グスマン教授のシステムの新味はマルチであり、アダムの言葉といわれるアイマラ語だけをを用いて、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ語、オランダ語、イタリア語、ル - マニア語、ロシア語、スウェ - デン語の10の言語会話者と、それぞれの対話者が相手の言語を知る必要なしにchatできる点にある。

現在アイマラ語人口は、チチカカ湖を中心にボリビアに124万人、ペル - に30万人、チリ - に4万9千人、計160万人いるといわれ、グスマン教授のクオプチャイ (QOPUCHAWI) と称するこのサ - ビスが実用化されることへの期待は大きい。

ノーベル物理学賞とボリビア

鎌田甲一

日本人で最初にノーベル賞を受賞したのが湯川秀樹博士であることはよく知られているが、それを決定づけたのがボリビアで行われていた宇宙線の実験であった。その経緯を概略紹介する。

物資の最小要素である原子の構造は20世紀に入ってから次第に明らかになった。その構造は、中心に原子核という重い粒子があり、その周囲を電子群が回っているというもので、この構造が安定して存在することを理解するために量子力学という新しい自然法則が生まれた。

次に、原子核とは何かという問題が生じた。原子核は電子の数千倍も重い。この原子核が原子の中心に鎮座して安定に存在するのは何故か。どんな力が核の安定を支えているのか。

世界中の研究者が難問に取り組んでいる時、湯川博士が一つの理論を発表した。それは、原子核の中に中間子という粒子があり、これが原子核を固める力になっていて、中間子の質量は電子の約200倍であるという理論であった。1935年、湯川博士28才のときである。しかし、当時このような粒子は未だ知られていなかった。この理論は国内では理研の仁科芳雄博士らが注目し励まし続けたが、世界の科学をリードしていたヨーロッパでは必ずしも暖かく迎えられたわけではなかった。

1937年に仁科博士のグループとアメリカのグループが宇宙線の中に電子の200倍の粒子を同時に発見し、湯川中間子かと色めき立ったが、やがてこれは別物と判明した。

第二次世界大戦中は世界中で基礎科学は下火になってしまったが、1945年に戦争が終わると、各国の学者が一斉に動き出した。その一人がイギリスのパウエル博士である。彼はイタリアやブラジルの若い学者をひきつれ、ボリビアのチャカルタヤ山上に宇宙線の観測装置を設置した。この観測所は5200メートルの高さに

あり宇宙線の観測には最適の場所である。

この観測で、パウエル博士は電子の200倍の質量の粒子を宇宙線中に発見した。この粒子は正真正銘の湯川中間子であり、この発見によって原子核は何故安定に存在し得るかという積年の謎に解答が与えられた。

この発見によって、湯川博士は1949年にノーベル物理学賞を受賞した。翌年パウエル博士もノーベル賞を受賞した。

この観測が行われたチャカルタヤ山宇宙物理観測所は世界最高の高さを誇る。ラパスのサンアンドレス大学の所属であるが、外国の研究者にも開放され、国際共同研究が行われている。日本の研究者も1960年以来研究を続け、科学者、技術者の往来も盛んで物理学における日本・ボリビア交流のキーステーションとなっている。

ボリビアで活躍する日系人

その1

詩人ペドロ・シモセ

細野豊

数回に亘るシリーズで、ボリビアの色々な分野で活躍する日系人を紹介します。その第一回目は、詩人ペドロ・シモセを取り上げます。

彼は1940年3月30日、ベニ州リベラルタで日本からの移住者、下瀬甚吉とリベラルタ生まれの日系女性、ライダ・カワムラの長男として生まれました。生地リベラルタで初等、中等教育を受け、1959年(19歳)にラパス市のサンアンドレス大学の法学部に入学しましたが、1961年に中退、詩とジャーナリズムに専念し、この年に最初の詩集『亡命における三つのピアノ練習曲』を出版しました。1964年、フランス政府の奨学金を受けて1年半リールに留学、ジャーナリズムを学びました。この留学中にスペインのマドリッドへ旅し、そこで知り合ったロサリオ・バロソ・サルガードと1966年に結婚しました。

1971年に起こった右派と左派の武力衝突の際、左派の側についたため、その後闘争に勝利して政権についた軍部により国を追われスペインへ亡命しました。その後今日に至るまで、家族と共にマドリッドに住んでいます。

彼が2000年10月に来日した際に伺ったところによれば、その後ボリビア政府は彼に謝罪し、1999年に国民文化賞を贈ったとのことでした。

彼の詩は、12カ国語(日本語を含む)に翻訳され、国の内外で高く評価され、多くの賞を受けましたが、中でも重要なのは1972年に詩集『ぼくは書きたいのに出てくるのは泡ばかり』がキューバのカサ・デ・ラス・アメリカス主催の国際コンクールで第1位になったことです。

詩集には、上記の『亡命における三つのピアノ練習曲』(1961)のほか、『ぼくは書きたいのに出てくるのは泡ばかり』(1972)、『リベラルタその他の詩』(1996)、『きみはそれを信じないだろう』(2000)などがあり、物語作家、ポピュラー音楽の作詞、作曲家としても知られています。

彼の詩『わが父の伝記』(後掲)からも分かるように、彼は勤勉、実直、謙虚などの美德を備えた典型的な日本人である父、下瀬甚吉を尊敬しており、彼の人格形成には父の人となりや生き方が大きく影響しています。また、日本文学についての造詣も深く、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、谷崎潤一郎、大江健三郎、安部公房、三島由紀夫等をスペイン語訳で読み、それぞれの作家についての的確な評価をしています。

父下瀬甚吉は山口県吉敷郡大道村字鷲崎で1885年(明治18年)に生まれました。大道尋常高等小学校卒業後、農業、運搬業等に従事しましたが、1908年ペルーへ移住。チャンチャンマイヨ耕地に入って6ヶ月を過ごしました。ペルーのカリャオ港に着いてから一旦首都のリマへ出て、リマから鉄道で入植地へ入ったときのことを下瀬はこう語っています。「われわれは移民と言われず、まるでけ

だもの扱いみたいに馬の寝るところに寝かされ、一等、二等には乗せんのです。」

6ヶ月の契約期間が過ぎると、よりよい生活を求めてマルドナードに行き、道路工事、ゴム採取、農業等に従事した後、1914年（大正3年）にアマゾン河の上流に当たるマドレ・デ・ディオス河を下ってボリビアのリベラルタに着きました。当時リベラルタは人口4,000人ほどの町で、そこに300から400人ほどの日本人（ほとんどが男性）がいたといわれています。いずれもペルーからマドレ・デ・ディオス河を下ってきた人達でした。

リベラルタで下瀬は仕立て屋を4年間営んだ後、商店経営に転職。第二次世界大戦たけなわの1943年3月、米国からリベラルタに住む日本人たちのもとに強制収容予定者と資産凍結対象商店の名簿が送られ、その名簿には日本人会長の職にあった下瀬も含まれていましたが、当地での日本人の評判がよかったため、ボリビアの官憲は日本人に好意的で、米国へ連行された日本人は一人もいませんでした。資産凍結で閉鎖された商店は数件ありましたが、資産を没収されることはありませんでした。

しかし、戦後は日本人或いは日系人であるための迫害を種々の形で受けました。そのことでペドロ・シモセは日本人移住100周年誌『ボリビアに生きる』（2000年3月、ボリビア日本人移住100周年移住史編纂委員会編、ボリビア日系協会連合会発行）に寄せた小文「歴史を持たぬ人々の物語」で次のように書いています。

「日本は戦争に負けた。戦いに敗れると、権力の中枢部から忘れられたボリビアのこの地方で、ドイツ人と日本人は自分たちが築き上げた経済と社会への貢献を無視した住民による報復を受け始めた。連合国側の勝利を盾にし、またアメリカ合衆国のやり方を真似て、地域のボスたちがドイツ人と日本人を追い詰め、財産を没収した。彼等は農業協同組合を解散させ、畑の作物をなぎ倒し、収穫物を燃やし、豚、馬、牛を殺した。すでにボリビ

アに帰化していた元日本人の農業者と商人は貧困のどん底へ突き落とされた。このような暴行と残虐な行動は警察がそれとなく同意し、傍観するなかで、ボリビア人たちによって行われたものである。誰も私たちに説明してくれなかった。誰も私たちに謝りもしなかった。1945年以降、ドイツ人や日本人の子供であることは不名誉なことであり、屈辱と侮辱に耐えなければならなかったのである。」

わが父の伝記

ペドロ・シモセ
細野豊記

男になった男、ぼくの全ての
種子、
風の中に撒かれた風の島、
巻き貝と火山が波を浴びて鳴り響いた。

亀たちが浜辺で陽を浴びる大地のこと
彼は知っていた。
そこでは稲妻が夜の羽毛を金色に染め
パンの木が
熱帯の雨の中で輝いた。

彼は歩いた
虎と木材の小道を。
（青い樹木と黄金の川の間で
彼は死を見つめ）

歌を口ずさみ
リュートの弦を張った。
大地を耕し
大地から詩をもぎ取った。
大気の中へ入り
大気から詩をもぎ取った。
風と竹の寓話で彼は僕を教育した。
（空を泳ぐ魚たち）
網と色のあたりをぼくらは航行し、
水から顔を出し、
光とオレンジの夢を見た。
暗い音を響かせ、羽毛のある火薬の中か
ら彼はやって来た。
他人が犯した罪についてこの人に何の咎
があるう？

今でもぼくには、陰鬱で静かな威厳に満ち平然と
湿った牢獄の中にいる彼が見える。
雨が遠ざかった頃、癒瘡木とアーモンドの森へ彼は帰ってきた。
ぼくらはともに
冷たい水が滴る火の西瓜を分け合った。
ぼくらはともに
果てしない忘却の祖国に感謝を捧げた。
ぼくらはともに
マホガニーの枝についた蘭とマチコ*を描いた。

このようにして彼は
息子たちや新しい友人たちに囲まれて、
ぼくが訪ねるたびにより若々しくなる。
ぼくは彼の家を音楽で飾るために
ギターを持っていく。

彼は
ぼくに菊の庭を見せ、
今舟を造っているところだと言う そしてぼくに
彼の友人でもあるぼくの友人たちのことを尋ね、
ぼくが煙草を憶えたかどうか、
恋人はできたかどうか...尋ねる。

彼は人間の謙虚な偉大さを知っており
彼が敬うように人々が彼を敬い、
彼が愛するように人々が彼を愛している
ことを知っている。

これがぼくの父だ

*南米産のコショウ科の植物

詩集『文字どおり』(1976)より

日露戦役の勇士 アンデスに眠る

前田慎一郎翁の思い出

池田公明

近江の国、豊郷村に生まれ、繊維問屋、日露戦争、ペルー移民、アンデスを超えてアマゾンでのゴム採取。そして農場経

営から穀物仲買人と数奇の人生を終えられた前田翁の一生をご紹介します。

私が前田翁に初めて会ったのは昭和35年6月のことでした。私はラパスの駐在員として昭和35年6月赴任し、ボリビア総代理店の西商店にご挨拶に上がったとき紹介されました。前田翁は76歳。西商店で総務と庶務を担当されていましたが、柔和な風貌の中に明治男の逞しい気骨を秘められた偉丈夫でした。

ラパスでの週末は前田翁共々、西家で夕食をいただくのが常で、食後の団欒の折々トツトツと語られる前田翁の思い出話に私は引き込まれたものでした。

前田翁は明治30年近江の豊郷尋常小学校を卒業して伊藤本店に入りました。まだ先代の伊藤忠兵衛さんもお元気でした。3ヶ月間、行儀作法、読み書き、ソロバンを仕込まれ、最初は小役と呼ばれ朝早くから掃除・倉庫番、そして荷受け出荷、配達も出来るようになりました。

(日露戦争始まる)

明治37年に徴兵検査を受け、甲種合格。直ちに近衛師団歩兵連隊に配属。新兵教育も早々に東京を発ち3月宇品から出港、朝鮮の鎮南浦に上陸。海軍が旅順港閉塞作戦を実行したのはこの時期でした。遼陽作戦の後の沙河会戦でロシア軍の小銃弾を受け負傷。この弾はまだ右足に残っています。総攻撃、夜襲、白兵戦で戦友は次々に倒れました。明治38年日露講和の後、日本へ帰ったが、すっかり人生観が変わりました。

(南米雄飛を目指す)

周囲の人は伊藤忠社への復職を勧めるのですが、戦争で受けた心の傷は深い。田舎でブラブラしていたのですが、「海外雄飛を！南米の大地は君を待つ」という移民会社のポスターが目にとまりました。神戸に向かい手続きをして明治39年の春、英国籍の移民船に乗りました。22歳でした。悪夢のような戦争の記憶を忘れ去りたかったのです。

(ペルーで苦難の日々)

50日の航海でペルーのカリヤオ港に到着。すぐ砂糖きび農場での労働が始まりましたが、文字通り奴隷労働です。寝床は枯草、便所もありません。カニエテ農地の裏山に石碑を立てて同僚を埋葬するのが日課となった時期もありました。移民会社の調査不足、先方との契約の不備。海外雄飛とは名ばかりの棄民だったと思います。ストライキで抗議しても何ら受け入れられず、集団脱走を考え始めたのは就労してから半年経った頃です。

(リマへの脱走)

同僚5名と脱走を決意し、水を十分に持ち真夜中に脱出。海岸線に沿って北上、昼は岩陰に隠れ6日目にリマにたどり着きました。

(アンデスを超えてアマゾンへ)

そこで耳寄りな話を聞いたのです。アンデス山脈の向こう側にアマゾンがある。アマゾンは世界唯一のゴムの生産地。ゴム採取に勤勉な働き者の日本人が必要。支払いは金貨、農場の千倍以上。

この年、明治40年の移民船乗船者400人のうち100人は最初からアマゾンに向かい、その内60人は滋賀県出身と聞いて、即座にアマゾン行きを決意しました。リマからモリエンドまでは船、アレキパからチチカカ湖岸のフリアカまでは英国が作った鉄道にりましたが、そこが大変でした。徒歩で標高4800メートルのアリコマ峠を目指しましたが、途中寒さと疲労と高山病で何人も死にました。薄い空気で呼吸困難になった友人に肩を貸し、氷と雪の道を登り、死の恐怖に耐えました。リマを出てから30日後に骨と皮だけになってアマゾンの源流タンボタに着きました。

(狂乱のゴム景気の中で)

ちょうど自動車時代が始まった頃で、ゴムタイヤ用に欧米のゴム需要がアマゾ

ンに殺到した時期でした。アマゾンの原住民に働く意欲はありません。インカの高地民族は抵抗力がなく、熱帯やアマゾンではすぐ熱病で死んでしまいます。勤勉で働き者の日本人は欧米のゴム商人に歓迎されました。アマゾン上流の天然ゴムはイキトス、そしてブラジルのマナウスに集荷し、輸出されましたが、高い値段で飛ぶように売れた時代でした。明治38年から42年に2000人以上が入植し至る所に日本人村ができ、町の名前に東京・横浜をつけ日露戦争にあやかって、東郷、乃木という小さな村が今でもあります。金貨で何千円も稼いで日本に帰った者もいました。私はペルー領マルドナドでのゴム採取でかなりの資金ができたので、それを元に小さな農場を始めました。煙草・コカが中心で、マドレ・デ・ディオス河の水利を利用してボリビアのリベラルタに生産物を送り少なからず利益をあげました。

(穀物商として活躍)

このアマゾンの天然ゴムブームは大正12年頃に急に冷え始めました。私は農場を友人にまかせてリベラルタに移り農作物の仲買商を始め、米、じゃがいも、小麦を扱いました。日本人は信用があり、白人や現住民からも尊敬されていました。当時20代30代の若者の集団は現地の女性にもてました。いまや混血の2世3世時代で、リベラルタの市議員の3分の1は日系です。時々事務所に来られたエルネスト西川上院議員の父上は、前田の仲間。中央銀行のホールへ吉田も子供の頃よく遊びに来たものでした。

充実した20年をアマゾンで過ごし、穀物の他に日本や欧米から雑貨も手がけ、山あれば谷ありでした。

(首都ラパスへ)

昭和8年秋、裸一貫でラパスへ。公使館に伺ったところ、「会計・総務をやる人が1人必要。すぐ入れ」との公使の命令、すぐ採用。その当時の公使館は公使と書記官が1人だけ。公用車さえ無く、公使

は西商店の電三郎社長からシボレーの新車を借りていた程でした。

(第二次世界大戦と戦後)

昭和16年12月戦争が始まり、公使館も閉鎖。まだ輸入商が中心だった日系人たちは皆店仕舞いです。親しくしていた西さんにお世話になることになりました。

戦争が終わり貿易再開とともに、西商店は繊維を主体に活動を再開しました。思いだせば長い道のりでした。七転び八起き、我が人生に悔いはありません。

前田翁は昭和52年に93歳の天寿を全うされ、アンデスの秀峰イリマニを望むラパスの墓地に眠っておられます。

「かつて、日本の若者が目指したはるかな南米への道を今、貴方の子孫が故国日本を目指してやってきました。その数は今や30万人を超えました。貴方の勤勉な血を受け継いだ子孫達は日本で蓄えた資金を持って南米に帰り、新しい分野で活躍を開始しています」

前田翁にこのことを報告したらなんとお答えになるでしょう。 合掌

じゃがいもの旅の物語	その1
インカからジパングまで	

杉田房子

私達が日ごろ慣れ親しみ一日たりともなくては済まないじゃがいも。ヨーロッパを襲った飢饉に苦しむ人達を救った「お助けいも」と感謝されたじゃがいもが生まれ故郷のボリビアの産地からヨーロッパを経て日本へ到着する70年あまりの「じゃがいもの旅」の日々はどうだったのだろうか。徳川家康が天下をとる前後の頃日本にやってきたじゃがいもが体験し見聞した「物語」をお伝えしよう。

アンデスを支配するインカの皇帝が住む都では、巨石で豊んだ神殿に、選び抜かれた聖処女が噛んで醸したとうもろこし酒を供えた。太陽が一番低くなる正午、

皇帝は神殿を仰ぐ広場でインディオの主食じゃがいもをはじめとする供物を祭壇に捧げる。陽光は、皇帝の衣の金銀刺繍にきらめき、広場をうずめる貴族と神官と戦士の胸を飾る栄誉の金銀細工に照り映えた。

インディオは生のじゃがいもをパパス、乾燥したのをチュノと呼んだ。大きすぎたり小さすぎたり、細かったりゆがんでいたり、まんべんなく乾燥しなければならぬチュノに向いていないじゃがいもは、パパスのまま食べるか、次の植付けの種いもにする。仕分けは、踏む女たちの足の裏の大きさが決めたが、とりわけ形が整っているのは、何度も水洗いしてアク抜きの手間をかけ、真っ白なチュロにする。

「輝く太陽に真っ白なチュノを捧げれば、太陽はまたすばらしいパパスを、そしてチュノを与えてくれるだろう」

アンデスに住む者は、そう信じてきた。いま、足首まで覆う長い腰布をすねまでからげて、女たちが畑で踏むチュノは黒い石さながらになっている。夜は山地の崖きわにおいて凍らし、朝は陽当たりに広げ、朝は陽当たりにひろげ、凍えが溶ける昼下がりに踏む。凍らせては温め戻しし、にじみでる水気を絞りつくした黒と白のチュノだけが、カビも生えず、腐らない。

じゃがいもを焼いて夕食にすると、ラマの糞を乾かしたサキエを燃やす青白い炎が薄暮に揺れ、焼きじゃがいもの香りがただよう。

「産地の本物のパパスの匂いは特別にいい」

村の男たちは鼻をひくつかせる。パパミクク じゃがいも食いとも呼ばれるインディオはパパスの良し悪しはすぐわかる」

「暖かい平地のパパスは芽はじきに出すし、シワは寄るし、色は黒くなる。そこへいくと山地のパパスは生でも長く保つからな」

厳しい風土で生きるために、大地がはぐくんだ天性なのか、アンデス山地のじ

やがいもは掘り出されてしばらくすると、休眠する。長いもので一年近くも休眠して、芽も出さず、変質もせず、形も変わらない。

「まったく、山地のパパスは食物の黄金だ」

ボリビア国歌にこみ上げてくる思い 在日ボリビア人グループ連絡会に ついて

田中ネリ

先ず、在日ボリビア人グループ連絡会 (Coordinación de Grupos Bolivianos en Japón) の目的、及び活動開始を機に企画したイベントに関して述べさせていただく前に、この機会を与えて下さった日本ボリビア協会に心から感謝致します。

晴天に恵まれた 2001 年 8 月 5 日、約 180 人が本厚木の戸沢橋スポーツ広場に集まり、サッカー大会が行われる側ら、エンパナーダ (empanadas) や焼豚肉 (chancho asado) を頬張り、ソニード・ラティーノ楽団のラテン音楽に身を任せると、その五感の刺激から一瞬、ボリビアの一角にいる錯覚さえ覚えるほどでした。

サッカー大会が終了し、メインイベントの来賓者祝辞及び大会優勝者の授賞式が始まると共にボリビア国歌が響き渡り、久しぶりに祖国の国歌を斉唱してこみ上げてくる思いを感じ、目頭を熱くするボリビア人の姿が多く見受けられました。

次に、ボリビア独立記念日を祝うという共通目的で集まった人々に、井上衆議院議員、ボリビア大使館の一等書記官パトリシア・サンヒネス氏、日本ボリビア協会の細野豊氏が祝辞を述べました。その内容は正に我々が意図している目的と合致し、非常にうれしく思いました。

現在約 3,000 人のボリビア人が日本全土に点在、多くのラテンアメリカ人と同様、工業地帯周辺に在住、主に地域の教会などを拠点に広義のグループを成しています。特に地域間の距離という要因が弊害となって、互いの相互交流活動はほとんどないと言えます。

この状況に対して、有志 4 人が在日ボ

リビア人グループ間の情報交流や意見交換の必要性を感じ、在日ボリビア人グループ連絡会を結成し、在日ボリビア人グループのコーディネーション活動を実施することを考えました。

コーディネーションの機能として：

各々のグループに関する活動や問題点の情報交換

共通課題に関する話し合い

文化活動や国際交流の企画

共通課題に取り組むためのチーム作り

等を目指し、在日ボリビア人が自らのアイデンティティーを保ちながらも、日本社会へスムーズに適應することに役立つようなグループ間の橋渡し機能を目的としています。

在日ボリビア人のインターネット普及率はまだ低く、スペイン語での IT 講習等を通して普及率を高める課題は残されているものの、在日ボリビア人グループ連絡会はグループ間の物理的距離や時間という制約を解消するのに、情報交換の手段としてホームページを公開しました。

我々の目下の活動は関東地域におけるボリビア人グループと直接コンタクトをとって、ネットワーク作りを始めることです。確かに時間と根気のいる活動であり、今後どうということが可能なのか未知ですが、是非この活動に対するご理解とご協力をお願い致します。

ボリビアの音楽と祭り

ボリビアの音楽と言えば、まず挙げられるのは「folklore」。folklore とは、そもそも「民俗学」あるいは「民間伝承」を意味する言葉だが、日本では特にアンデス地方の音楽を指す言葉として使われている。現在耳にするfolkloreの多くは、先住民の音楽にスペイン人がもたらした音楽が影響を与えることで生み出されたもので、その新しい影響は楽器だけではなくリズムにも及んでいる。楽器について言うならば、ケーナやサンポーニャ(シークとも言う)

などの管楽器には、そのスペインに求めることができるものが多いが、ギターやチャランゴなどの弦楽器は明かにスペイン人によりもたらされたものである。

更に、先住民とスペイン人のそれぞれの音楽の影響の上に、更に奴隷とシアフリカから連れて来られた人々がもたらした音楽の影響をも受けて生み出された音楽があったり、オリエンテではアマゾン地方に住む先住民の影響が強い音楽が残っていたりと、ボリビアの音楽は非常にバラエティーに富んでいる。そして、こうしたバリエーションに富んだ音楽は各地で催されている祭りには欠かすことができないものとなっている。住民の多くがカトリック教徒であるボリビアでは、カトリックの暦に合わせて数多くの祭りが催され、クリスマスや主御公現の祝日（1月6日）聖週間（セマナ・サンタ）といった主要な祭りが催される。こうした一年を通じて各地で行われる大小様々な祭りの中で代表的なものとして、キリスト教の四旬節の前の週に行われる「オル口のカーニバル」、5月下旬から6月にかけて行われる「ラ・パスのグラン・ポデール」、8月の「コチャバンバのウルクピーニャ」などがある。また「オル口のカーニバル」、「ラ・パスのグラン・ポデール」といった大きな祭りでは、「ディアブロ（悪魔）の踊り」あるいは「モレーノの踊り」といった独特の衣装や仮面を着けた踊りが披露される他、ボリビア各地から多くの人々がそれぞれの地域や村に特有の衣装を着けて参加する。（たばこと塩の博物館『魅惑のボリビア』より抜粋）

新刊書ご案内

白石健次著

『中南米移住事業遍歴』

農業移住事業の手記

文芸社

2001年6月出版

会員白石健次氏は、農業土木技術者として中南米の移住地で実際に手がけた軌

道を綴ったもので、そこには移住に携わる多くの人達の生活が見られる。よるこびも悲しみも苦労の数々。出稼ぎ日系人が移住先国の不況を嘆きつつも、日本への反転帰国を望まず、夢は移住先国にありとして、出稼ぎが終わった後再び中南米に帰る姿に、著者は自分の成してきた仕事の大筋に間違いはなかったのではという。貴重な資料としても価値ある作品である。

若槻泰雄著

『外務省が消した日本人』

南米移民の半世紀

毎日新聞社

2001年9月出版

何故日本人移民は捨てられたのか。無能、腐敗行政を糾弾する。

お願い

最近ボリビアに行った方、またはボリビアへの思いを発表して下さる方、どうぞ原稿を事務局までお届け下さい。ここで紙面が一新しました。これについてのご感想もお聞かせ下さい。

平塚教会でバザー開催

場所：平塚教会（東海道線平塚駅南口）

日時：2002年4月28日（日）

このチャリティーバザーはボリビア水害の復興を支援するためのものです。

会員のみなさまのご来場をお待ちしておりますとのことです。

編集委員

鎌田甲一 杉田房子 細野豊

会報名の由来

カントウータはボリビアの国花。低地に咲く花で、花弁は赤、花弁の付け根は黄、茎は緑でボリビア国旗と同じ色。誰にも愛されるこの花は当協会誌の名にふさわしく、名づけました。